

11. 当科におけるC型慢性肝炎に対するインターフェロン治療成績

内科学（消化器）

田中孝尚, 室久俊光, 島田紘爾, 水口貴仁, 金森 瑛, 渡邊詔子, 有阪高洋, 金子仁人, 飯島 誠, 平石秀幸

【背景】C型慢性肝炎治療は1992年にインターフェロン（IFN）治療が保険適応となってから、現在の直接作用型抗ウイルス薬（DAA）に至るまで様々な治療が行われてきた。当科においてもC型慢性肝炎患者に対して加療を行ってきた。しかし現在、IFNフリーによるDAA製剤経口内服治療が主流となり、C型慢性肝炎治療は一つの節目を迎えている。

【目的】当科でのC型慢性肝炎に対するIFN治療成績と、その後の経過を検討する。

【対象と方法】1989年12月から2015年3月までに当科にてIFN治療を導入したC型肝炎923症例（男性588例女性335例、平均年齢50.9歳）延べ治療回数1062回を対象にした。IFN投与法別に治療効果をSVR（HCV-RNAが治療終了後6ヶ月以上持続陰性）、NR（HCV-RNAが陽性）、DR（判定できない例）に分けて検討した。また肝細胞癌（HCC）の発生の有無とIFN治療後の期間について検討した。

【結果】全体のSVRは46.2%（1051例中486例）であった。HCV Genotype2でIFN治療効果が高かった。経過観察可能であった症例の平均観察期間は87.3ヶ月でありHCCは637症例中63例（9.9%）に発生し、SVRからも399例中15例（3.8%）の発生を認めた。NRからのHCCの発症がSVRに対して多かった。またSVRが得られてから10年程度を超えると、HCC無発症率は一定であった。

【考察】SVR症例からも最長252ヶ月（21年）後にHCCの発生を見た症例が存在し、SVRであっても最低10年間程度のフォローは必要であると考えられた。

【結語】IFN治療後の経過観察の重要性について再認識する必要があると思われた。

12. アレルギー性鼻炎の治療により昼間の眠気が改善したOSAの1症例

¹⁾ 大学病院睡眠医療センター, ²⁾ 耳鼻咽喉・頭頸部外科学, ³⁾ 内科学（心臓・血管）, ⁴⁾ 内科学（神経）, ⁵⁾ 看護学部看護医科学（病態治療）中島逸男^{1,2)}, 春名眞一^{1,2)}, 有川拓男^{1,3)}, 鈴木圭輔⁴⁾, 宮本雅之^{1,5)}

症例：20歳男性, 大学生. 主訴：昼間の眠気.

【既往歴】副鼻腔炎とアレルギー性鼻炎があり幼児期から鼻閉の自覚があった。1日の睡眠時間は6~8時間であった。いびき・睡眠時無呼吸の指摘やカタプレキシーの既往は無い。

【現病歴】14歳頃～昼間の眠気を自覚し、中学・高校時代は授業中の居眠りを教諭からも指摘されていた。睡眠時間を十分にとっていたが、起床時目覚めが悪く疲労感もみられた。大学進学後は友人から居眠りを指摘され、自動車事故をおこしたこともあり、近医からの紹介で受診となった。

【身体所見】身長160cm, 体重58kg. Mallampati score IV, 小下顎を認めた。神経所見は特記所見なく、ピッツバーグ睡眠質問票の総得点（PSQIG）7点、日本語版エプワース眠気尺度（JESS）12点であった。

【検査所見】甲状腺機能を含む血液検査, 脳波, 頭部MRIでは特記所見を認めなかった。

耳鼻咽喉・頭頸部外科を受診し、ロイコトリエン受容体拮抗薬の内服とステロイド点鼻液により鼻閉は改善し昼間の眠気は軽減したとのことであった。

中枢性過眠症を鑑別のため、終夜睡眠ポリグラフ検査（PSG）と反復睡眠潜時検査（MSLT）をしたところ、PSGでは軽度の睡眠時無呼吸（AHI 12.3/h, ODI3% 9.9/h, Arousal index 24.0/h）を認める以外特記所見はなく、翌日のMSLTでは平均睡眠潜時11.5分、SOREMPは検出されず、ナルコレプシー等の中枢性過眠症群の診断基準を満たさなかった。PSQIG 5点, JESS 7点であった。

【結語】睡眠時間の十分な確保とともに鼻閉の保存的治療により昼間の眠気の改善がみられた1例であるが、鼻閉自体が睡眠状態や日中の生活へ大きな影響をもたらす可能性が示唆された。